

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

日本語のために

山岡洋一

- 片仮名語の悲惨 - 「モラルハザード」と職業倫理の欠如

国立国語研究所が分かりにくい外来語 63 語について言い換えを提案した。外来語は「読み手の分かりやすさに対する配慮よりも、書き手の使いやすさを優先している」点に問題があり、「官庁・報道機関など公共性の強い組織が、なじみの薄い外来語を不特定多数の人に向けて使用するとき、さまざまな支障が生じる」ので注意すべきだという。ほんとうにそうなのかを「モラルハザード」という片仮名語を例に考えていく。

誰も教えてくれなかった英語(3)

柴田耕太郎

- カンマの用法 (1)

日本語の読点もそうだが、カンマは文を読むうえできわめて重要なのに、注意を払われることが少ない。ここでは、準則と考えられる点を整理し、そのうち挿入と言換えを取り上げる。

懇親会での議論より

山岡洋一

- 本はなぜ売れないのか

4月20日の懇親会とその後の二次会で議論した内容のうち、翻訳出版を考えるときに避けて通れない問題、なぜ本が売れなくなったのかという問題を取り上げる。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

片仮名語の悲惨 - 「モラルハザード」と職業倫理の欠如

「まともな料金を貰ってれば、たった一語が分からないだけでも専門書を買って調べるけど、料金が安いと、分からない用語があったらそのまま片仮名にしとくしかなくなるよ」と、友人の翻訳者が嘆いていた。翻訳者は分からない言葉があれば徹底して調べる。片仮名で誤魔化すようなことはしない。これが翻訳者の職業倫理というものだ。そういう心意気を知らない顧客に不当に安い料金を提示されると、職業倫理もへたくれもあるかという気分になるというわけだ。

翻訳を職業にしているものにとって、意味が分からないまま片仮名にするのは、最悪の敗北だ。だから、片仮名の語を嫌う。ところが世の中、片仮名語大好き人間がやたら多い。翻訳者は孤軍奮闘の状態になっている。

2003年4月に国立国語研究所が分かりにくい外来語63語について言い換えを提案したとマスコミで報じられた。思わぬ援軍がきてくれたのだろうか。だが、フリーの翻訳者というはお上の対極に位置している人間だから、「国立」という字をみただけで警戒感をもつ。同研究所のサイトにあった提案を読んで、やっぱりかと思った。これは援軍ではない。最善の場合でも無関係、悪ければ邪魔になるだけだろう。

提案を読んでまず気になったのが、読点(、)の代わりにカンマ(,)を使う無神経さだ。ほんとうに日本語を大切にしている人が国立国語研究所にいれば、このみっともなさに文句をいわないわけがない。この一点だけで、日本語について語る資格がない人たちのだろうと考えたくなる。

それはともかく、提案の中身をみてみよう。なぜ外来語の言い換えを提案するのか。外来語は「読み手の分かりやすさに対する配慮よりも、書き手の使いやすさを優先している」ものであり、「官庁・報道機関など公共性の強い組織が、なじみの薄い外来語を不特定多数の人に向けて使用するとき、さまざまな支障が生じる」という(いくらなんでも日本語の文章にカンマを使うわけにはいかないので、読点に変えてある)。つまりこうだ。お上の側は分かって使っているのだが、下々のものは無知で愚かだから、片仮名語を使うと意味が通じない場合がある。無知で愚かな人たちに配慮するべきだ。

ほんとうにそうなのだろうか。片仮名語が使われる理由はいくつもある。そのひとつは、はったりや虚偽威し(こけおどし)だ。相手が知らないと思うから使う。こういう手を使う人はたいてい一知半解で、言葉は知っていても意味はあまりよく知らない。よく考え、よく知っていれば、相手に伝えたいのが人のつねなので、奇妙な片仮名語なんぞは使わない。「官庁など公共性の強い組織」の人たちに片仮名語を使わないよう訴えるのなら、はったりや虚偽威しはかならず見破られる、みっともないから止めようよという方がいいように思う。

片仮名語が氾濫する理由はほかにもいくつかあるので、そのひとつひとつについて検討を加えていくべきだと思う。国立国語研究所というからには、税金で運営されているはずで、そうした点をしっかりと検討する余裕があるにちがいない。まともな研究に基づいて片仮名語を減らす提案をすれば、もう少し意味があるのと思う。

「モラルハザード」という語

国立国語研究所が外来語の言い換えを提案した翌日の全国紙朝刊一面に、こんな書き出しのコラムがあった。

オウム真理教の松本智津夫被告への死刑求刑に至る七年を振り返ると、その残忍で凶悪な犯行を生んだ時代に思いがゆく。バブル崩壊と若者を取り巻くモラルの空洞化。「倫理の欠如」と訳されるモラルハザードが社会の隅々に及んだ。

次の段落では外来語の洪水を嘆き、国立国語研究所による「言い換え語」を紹介しているので、この提案に触発されて書かれたものであることは間違いない。だが、ここで使われている「モラルハザード」とはいったい何なのか(ちなみに、この語は今回の国立国語研究所の提案では取り上げられていないが、2003年10月発表予定の次回提案の対象になっている)。コラムの著者は「社会全体に道德観がなくなっていること」という意味だと考えているようだが、ほんとうにそうなのか。

この語の由来、意味、使われだした経緯などを考え

ていくと、おそらく、片仮名語がいかに劣った言葉なのか、そして社会にとって害悪になるのかが理解されるはずである。少々七面倒くさい文章になるが、「モラルハザード」について検討していこう。

保険用語としての moral hazard

片仮名語の「モラルハザード」の語源は、保険の世界で使われる moral hazard である。たいていの経済用語辞典にでていられるほど有名な語であり、「道徳的危険」と訳されてきた。どの辞典をみても、実体的危険 (physical hazard) と対になる用語だと書かれている。

この語の意味は、火災保険の例を考えてみるとよくわかる。普通なら、自分が所有する建物が焼ければ丸損になるが、火災保険に加入すると、いわゆる焼け太りの可能性が生まれる。損得の計算が変わるのだ。このため、普通なら、自分が所有する建物に放火する人はまずいないが、火災保険を掛けると、保険金目当てに放火する場合もでてくる。火災保険は本来、建物で加入者の故意によるものではない火災が発生する危険 (実体的危険) に対するものだが、保険によって逆に、火災の確率が高まるという側面があるのだ。この部分の危険を、保険会社は「道徳的危険」と呼ぶ。

このように、「モラルハザード」の語源である英語の moral hazard は、「若者を取り巻くモラルの空洞化」とか「倫理の欠如」とかを意味する言葉ではない。保険という特殊な世界で起こる厄介な現実を示す専門用語なのだ。

「モラルハザード」の登場

ではこの言葉が「モラルハザード」という片仮名語になったのは、いつ、どういう経緯があったからなのだろう。

「官庁・報道機関など公共性の強い組織が」「モラルハザード」という「なじみの薄い外来語」を使うようになった時期も、使うようになった経緯もはっきりしている。

時期は、1997年の秋、山一証券、北海道拓殖銀行などの金融機関の経営破綻が相次ぎ、金融危機が深刻化したところである。金融危機にあわてた政府は、大手金融機関が次々に破綻して金融恐慌になるのを防ぐために、さまざまな対策をとった。その動きに対して、アメリカを中心とする欧米の当局者や経済学者、エコノミストから、moral hazard に注意すべきだとの意見が出された。日本にはアメリカで学んだことを自慢し

たい官僚や学者や評論家がたくさんいるから、この主張をいち早く取り入れて、「モラルハザード」に注意すべきだと、したり顔で論じるようになった。

保険用語から金融用語への意味の拡張

ここで問題になるのは、欧米から moral hazard に注意すべきだとの指摘があったのはなぜかである。

上述のように、moral hazard は保険の世界の言葉だ。なぜ、金融危機と関係があるのか。もちろん、保険会社も金融機関のひとつだが、1997年に危機に陥ったのはとくに銀行であって、保険会社ではなかった。それに、金融危機の際に保険金詐欺に注意しろというのはなぜなのか、理解しづらいはずである。

じつは、簡単な理由があって、銀行業界の危機ではつねに moral hazard が問題になる。銀行が破綻すると、預金保険などの仕組みがあって、預金者が保護されるようになっていっている。銀行が破綻するという危険に対する保険があるのだ。保険を引き受けているのは保険会社ではなく、通常は国なので、火災保険を引き受けている保険会社が「道徳的危険」を心配するのと同じ理由で、国は moral hazard を心配すべきなのだ。

具体的にはどういう危険を心配すべきなのだろうか。火災保険なら保険詐欺を心配するわけだが、預金保険詐欺というものがあるのだろうか。

具体例をみるのが一番分かりやすいだろう。1980年代初め、アメリカでは貯蓄金融機関 (S&L) と呼ばれる中小金融機関の経営危機が深刻になった。短期の預金で資金を集め、長期の固定金利住宅ローンを貸すのが業務の中心だが、短期金利が急騰して逆ざやになり、損失が膨らんだからだ。

このころ、カリフォルニア州の貯蓄金融機関コロンビア S&L は思い切った賭にでた。常識外れの高利で預金を大量に集め、金利が低下すれば大儲けができる金融商品に注ぎ込んだ。金利が上がるか下がるかは誰にも分からないので、コインを投げてどちらに賭けるかを決めたといい。幸い、その後に金利が急激に下がったので、思惑通りに巨額の利益を確保でき、経営危機を脱した。経営者はもちろん、高利での預金集めとコイン投げという「創造的」な方法で経営危機を乗り切った自分の功績に報いるため、巨額のボーナスを自分に支払った。ところがこの経営者はこれに味をしめてその後も同様の賭を続け、最後には負けがこんで桁外れの損失を被り、政府が公的資金を投入して破綻

処理するしかなくなった。念のために繰り返すが、以上は作り話ではなく実話である。コロンビア S&L は一時期、金融の規制緩和の成功例としてもはやされ、やがて、失敗例として有名になった。

このような無茶な経営が可能になったのは、預金保険という制度があるからだ。第1に、金融機関が常識はずれの高利で預金を集めていると聞くと、普通なら預金者はよほど危なくなっているのだらうと警戒し、預金するどころか、逆に預金を引き揚げようとする。ところが預金保険があるから預金の元利は全額保護されますといわれると、預金者にとって危険はなくなるので、高利にひかれて預ける人が多くなる。火災保険があるからという安心感から、火の用心をしなくなるようなものであり、「道徳的危険」の一種だといえる。

第2に、経営者にとっても、預金保険があるから安心して思い切った賭けができるという面がある。何も手を打たなければ間違いなく経営が破綻する状況にある。金利が低下すれば大儲けができる金融商品に巨額を注ぎ込むとどうなるか。金利が上がれば巨額の損失を被る。だが、その結果は経営者にとって、何もなかった場合と同じだ。経営が破綻し、損失は国が面倒をみてくれる。金利が下がればどうか。大儲けできるので、経営破綻の危機から逃れられる。損得を冷静に計算すれば、一か八かの賭にでるのが正解になる。だが、これは経営が破綻したときに自分ではなく、国が損失を負担するという仕組みがあるからだ。国の側からみれば、賭をしそうになった段階で破綻処理した方が、はるかに負担が軽くなる。火災保険でいえば、2回に1回は大火災になるのを承知のうえで、派手に花火を打ち上げるアトラクションで客を集めるようなもので、「道徳的危険」の一種だといえる。

大手銀行のひとつがつぶれたとき、政府にとって一番心配なのは、預金者が動揺して、ほかの銀行からも預金を引き出そうとすることだ。銀行には預金引き出しの長い列ができる。取り付け騒ぎだ。こうなれば、健全な銀行すらあっという間に破綻する。そして、どの銀行も健全とはいえない状況があるのだから、国内の銀行がつぎつぎに破綻し、金融恐慌になって経済が壊滅することにすらなりかねない。そこで政府は、預金を全額保護するから大丈夫だと必死になって宣伝する。

だが、それによって逆に銀行の損失が膨らみ、最終的に公的資金で負担する金額が桁外れに多くなる危険がある。政府はこの危険にも注意すべきだというのが、

moral hazard という言葉の意味だったのだ。

このように、「モラルハザード」の語源である英語の moral hazard は、「若者を取り巻くモラルの空洞化」とか「倫理の欠如」とかを意味する言葉ではない。金融という特殊な世界で起こる厄介な現実を示す専門用語なのだ。

「モラルハザード」と訳された後の意味の転換

だが、欧米の当局や論者から moral hazard に注意するよう促されたとき、「官庁・報道機関など公共性の強い組織」はおそらく、この語の意味をよく知らなかったのだらう。経済用語辞典を調べて「道徳的危険」という訳語と、火災保険詐欺の例を使った説明を読んでも、金融危機との関連が分からなかったのではないだろうか。それで、意味が分からないまま取り合えず「モラルハザード」と訳した。いや、分かっている、重々承知のうえで、はったりと虚偽威し〔こけおどし〕のために意味が通じるはずもない言葉を使いはじめたのかもしれない。

いずれにせよ、「モラルハザード」は moral hazard とは似ても似つかぬ意味で使われるようになった。金融危機との関連では、経営が破綻した金融機関の経営者の責任を追求すべきだという意味で使われるようになったのだ。経営破綻で世間を騒がせたのに、のうのうとしているのは許せない。モラルはどこにいった、倫理が欠如している。私財を没収し、刑務所に放り込むべきだ。これが事実上、「モラルハザード」の意味になった。

こうして、金融機関が破綻すると、経営陣に私財の提供を求め、検察が乗り出して逮捕し、起訴するのが通例になった。罪状はどうでもいい、経営破綻の責任者を罰することだけが目的なのだから。

「モラルハザード」で変わる損得計算

破綻した金融機関の経営者に同情しているわけではない。同情する理由はどこにもない。いくつかの点、とくに、まだ破綻していない金融機関の経営者にとって、冷静な損得計算の結果がどうなるかという問題を指摘したいだけである。

英語の moral hazard で問題にしているのは、経営が破綻しそうな段階での経営者の損得計算だ。経営者が冷静に損得の計算をすれば、損失をさらに膨らませる可能性があっても、一か八かの賭にでる方がよく、賭に負ければ、損失をお国に負担してもらえばいいとい

う状態である。この意味での moral hazard を防ぐ手段をとるとどうなるか。経営者は破綻が目に見えてきた段階で、つまりまだ損失がそれほど膨らんでいない段階で、破綻処理を求めるしかなくなる。金融危機の芽を早めに摘めることになり、公的資金の負担も軽くなる。

日本語の「モラルハザード」の場合はどうなのか。ここで問題にしているのは、経営が破綻しそうな段階ではなく、破綻した後の処理である。破綻した後に経営者が何の処罰も受けないのはおかしいという点だけだ。このため、経営が破綻しそうな段階で、経営者が冷静に損得を計算すれば、何をやっても破綻だけは避けるべきだということになる。飛ばしだろうが、粉飾だろうが、貸し剥がしだろうが、何をやってもいい。破綻だけは避けなければならない。破綻すれば、私財をすべて提供させられ、拘置所に送られ、下手をすれば刑務所にだって送られるかもしれない。名古屋刑務所で革手錠をかけられる可能性だってあるのだ。

破綻が懸念される金融機関の経営者は、ひたすら保身をはかるしかない。ひたすら保身をはかる人材だけを昇進させて後継者に選ぶしかない。後継者が一歩間違えば、前の経営者になっていようが、元の経営者になっていようが責任を追求される。私財をすべて提供させられ、拘置所に送られ、下手をすれば名古屋刑務所に送られるかもしれないのだ。

英語の moral hazard を防ぐと、金融危機は早めに処理できる。日本語の「モラルハザード」を防ぐと、経営者は保身に走り、保身だけに必死になり、問題は先送りされる。1997年に moral hazard が「モラルハザード」と訳されてから5年以上たったが、日本の金融業界はまさに、問題先送りを続けて現在の惨状になっている。ひたすら保身をはかる経営者が老害をまきちらしている。

「モラルハザード」と職業倫理の欠如

外来語は「読み手の分かりやすさに対する配慮よりも、書き手の使いやすさを優先している」ものであり、「官庁・報道機関など公共性の強い組織が、なじみの薄い外来語を不特定多数の人に向けて使用するとき、さまざまな支障が生じる」というのが、国立国語研究所の見立てだ。だが、「モラルハザード」の例をみると、この見立てがどこか奇妙であることが分かる。「官庁・報道機関など公共性の強い組織」は、「書き手の使いやすさを優先して」片仮名語を使っているとはかぎらない。原語の意味を理解していないから、一

知半解だから使っている場合が少なくないのだ。

「官庁・報道機関など公共性の強い組織」の人間なら、たとえばこの moral hazard のような言葉が入ってきたとき、その意味を十分に理解して誤解の余地の少ない訳語を考える使命があるはずだ。その使命を果たそうとするのが、公共性の強い組織につとめる人間の職業倫理のはずである。

こうした職業倫理がしっかりしていれば、moral hazard に注意するよという折角の助言を無駄にすることはなかっただろうし、moral hazard と「モラルハザード」がまったく違った意味で使われていて、国際コミュニケーションの妨げになるような状況にはならなかっただろう。

意味の分からない片仮名語が氾濫している現状をみたとき、そうした片仮名語の一覧表で「モラルハザード」という言葉を見たとき、思いをはせるべきは、若者を取り巻くモラルの空洞化なんぞではない。公共性の強い組織ではたらく人たち、公共性の強い地位にいる人たちが正しい知識を伝えることにいかに怠慢になっているか、職業倫理がいかに欠如しているかのはずである。そしてもうひとつ、「モラルハザード」という言葉が使われるようになって5年以上たっても、金融危機を解決できないお粗末ぶりである。

増刷出来! 変化に惑わされない「真理」
翻訳とは何か - 職業としての翻訳
山岡洋一著 四六判・290頁 本体1,600円

甞る名著 - 絶妙に英訳された15万用例
NEW 斎藤和英大辞典普及版
斎藤秀三郎著 A5判・1,800頁 本体6,800円
ご要望にお応えし、お求めやすい「普及版」を発売

TranRadar 電子辞書 SHOP
<http://www.nichigai.co.jp/translator/>
定番電子辞書をお手ごろ価格でご提供しています

日 外 ア ソ シ エ ー ツ

<http://www.nichigai.co.jp/>
〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8
03-3763-5241

* what most pacifists contended が挿入節で、内容的には that 以下と同格。contended は(1)他動詞で、主張する (2)自動詞で、争う、のうちここは(1)
(平和主義者も主張したのだが、戦争は専制的な政治権力が国民に無理強いするものと、私は考えていた)

• We followed him back to the main street where we had first met him, and we watched him as he proceeded, with no trouble at all, to exchange his new umbrella for another pound note.
* proceed to exchange の付帯状況が with no trouble at all (取りかかって、雑作なく、to 以下の結果となった)。
(その人の後をつけていくと元の通りにできました。ずっと見ているとその人、なんの雑作なく新しい傘でまた一ポンドをせしめたのです)

言換え

• The best is not good enough for one who has standards, who knows precisely what he wants and insists on getting it.
* standards の内容を、カンマ以下で具体的に示している。
「すなわち」といった感じ。the best は最上級の譲歩
「どんなによいものといえども」
(自分の価値基準をもつ、つまり何としても手に入れたいものがある人にとっては、どんなにすばらしいものでも充分満足できるとは限らない)

• In 1848, a women's rights convention, the first in the history of the world, was held at Seneca Falls, New York.
* women's rights は形容詞的に (a) convention に掛かる。
第1のカンマは句の区切り、第2のカンマは補足して言換え、第3のカンマは主部が終わるしるし、第4のカンマは固有名詞の区切り。
(1848年、世界初の女性の権利に関する会議が、ニューヨーク州、セネカフォールズで開催された)

• But this has nothing to do with economic liberty, the right to exploit others for profit.
* カンマは economic liberty を具体的に言換えている。
(だがこれは経済的自由、即ち利益のために他人を搾取する権利とはなんら関わりない)

• She is a suspicious person, my mother.
* my mother は She の言い換え
(母さんって、疑り深い人なんです)

• I laughed, but all three of them, Lady Turton, Major Haddock, and Camen La Rosa had already turned away and were settling themselves back on the sofa.
* all three of them が、カンマ以下で具体的に示される

(私は笑ったが、彼ら三人、タートン卿とハドック少佐とカーメン・ラ・ローザはもう向き戻ってソファに身体をあずけようとしていた)

• Alfred, King of England, was a great ruler.
(イングランド王、アルフレッドは偉大な統治者であった)

• Dr. Angle, noted authority on Abraham Lincoln, arrived in Tokyo February 14th.
* Dr. Angle の属性をカンマ以下で示す。二つ目のカンマは主部終了のしるし。
(アブラハム・リンカーンの著名な権威であるアンジェロ博士は、二月十四日に東京に到着した)

• In the beginning, when I first came to the vicarage, I didn't have too bad a time.
* In the beginning = when I first came to the vicarage で、I didn't 以下に掛かる。
(司祭館に来た最初の頃は、そんなにひどいことは起こらなかった)

3、演習

それぞれのカンマの役割を考えながら、訳してみてください

In peace-time, even when there are two million unemployed, it is difficult to fill the ranks of the tiny standing Army.

My idea—and I believe it was a good one—was to try, by a process of confession and analysis, to discover a reason or at any rate some justification for my outrageous behavior towards Janet de Pelagia.

I had often wondered about the craze, a craze which I have caught myself since coming to live in Japan.

The individual features, the eyes, the nose, the mouth, the chin, are buried in the folds of fat around the puckered little face and one does not notice them.

I wanted, essentially, to address myself to an imaginary and sympathetic listener, a kind of mythical you, someone gentle and understanding to whom I might tell unashamedly every detail of this unfortunate episode.

The men who had made Florence the richest city in Europe, the bankers and wool-merchants, the pious realists, lived in grim, defensive houses.

And from the walls on which these wonders hang there issues a little golden glow of splendour, a subtle emanation

of grandeur in which he lives and moves and entertains with a sly nonchalance that is not entirely unpractised.

In peace-time, when there are two million unemployed なら、いわば偉さ(格)が同じ副詞句・節で言換え(平和時=200万人の失業者がいる)だが、even が条件に働き when 以下は挿入となることに注意(1番目のカンマは even 以下 unemployed までの情報を付加するカンマともとれる。その場合、2番目のカンマは文の区切り)。the ranks は、下士官・兵。「平時であり、かつ200万人の失業者がいる時でも」

平時で二百万人の失業者がいる時でも、このちっぽけな常備軍の兵員を充足するのはむずかしいのだ。

by a process of confession and analysis が挿入句。二つのダッシュに囲まれた部分も挿入。不可算名詞(justification)を修飾する some は、「或る」ではなく「いくらかの」cf. some water(いくらかの水)some boy (ある少年)

私の頭にあったのは、そう我ながらよい考えだったと思うが、心の内をさらけ出しその逐一を検証することで、私がジャネット・ド・ペラジアにしたあの馬鹿げた行いの理由、いや少なくとも自己弁護の材料を見出すことだった。

総称用法の the craze がカンマのあと、言換えで個別化(自分の craze)されている。catch は「捕まえる」ではなく「(風邪などに)かかる」

私はよくこの熱狂を不思議に思ったものだが、かくいうこの私も日本に来てからそれに憑りつかれてしまったのだ。

The individual features は以下四つの顔の部分の上位概念。the eyes, the nose, the mouth, the chin が挿入されている。

容貌の逐一、眼も鼻も口も顎も、シワシワの小さな顔の脂肪の寄り具合に押され、見分けがつかない。

essentially の前後のカンマは挿入というより、この語を強調するためのもの。an imaginary and sympathetic listener と a kind of mythical you さらに someone gentle and understanding to ~、が同格におかれ言換え。

是非とも、こちらの気持をよくわかってくれそうな人、

架空の聞き手であるあなた、私がこの悲しい出来事の詳細を臆面なく話すことができそうな寛容でものの分かった誰かに語りかけたかったのだ。

[{The men (who had made Florence the richest city in Europe)}], [{the bankers and wool-merchants}, {the pious realists}],/ lived in grim, defensive houses.

/ の前までが主部。第1と第2のカンマは言換へのしるし、第3のカンマは主部が終わるしるし。[]と[]が同格で言換え。あとの[]内の{ }と{ }が同格で言換え。bankers and wool-merchants は the が二つの名詞を等しく限定し「銀行家で羊毛商である人々」。grim と defensive (性質・形状を示す形容詞)を結ぶカンマは and の代わり

*The men と the bankers and wool-merchants と the pious realists が並列(カンマが and の代わり)とはとれない。第1回でやったように、形が異なる(職業と主義・主張など)ものは並列しないからである。

フィレンツェをヨーロッパ第一の富裕な都市にした人たち、すなわち銀行家であり羊毛商である敬虔な現実主義者たちは、堅固な防備充分の館に住んでいた。

And from the walls on (which these wonders hang)/ there issues <a little golden glow of splendour>, <a subtle emanation of grandeur in {which he lives and moves and entertains with a sly nonchalance (that is not entirely unpractised)}>.

二つの<>で、カンマのあとの部分が詳しい説明になっている(*これが並列のカンマでないのは、主部を受ける動詞が issues と単数になっているのでわかる)。lives と moves と entertains が並列。wonders は、ここでは美術作品のこと。emanation(c)放射物。with a sly nonchalance that is not entirely unpractised は、「素晴らしい美術品に囲まれていながら、そんな素振りもみせまいとするのだが、どこかぎこちない様子」ととる

そしてこうした素晴らしい作品が掛かっている壁から、すばらしい金色のさよけき輝き、そう、無造作ぶって彼がそこで暮らし、活動し、楽しんでいる絢爛とした輝きがかすかに沁み出てきている。

本はなぜ売れないのか

出版翻訳の現状を考えると、出版業界全体の動きを無視するわけにはいかない。そして出版業界はいま、長引く不況に苦しんでいる。過去5年以上、書籍の市場規模は減少傾向をたどっている（昨年、『ハリー・ポッター』の大ヒットで微増になったようだが）。その一方で出版点数は伸びつづけており、1点当たりの売上が急激に減少している。

ではなぜ本が売れなくなったのか。さまざまな説がとねえられている。若者が携帯に小遣いを使い果たして、本を買えなくなっているとされている。若者の活字離れという説もある。いわゆる新古書店が増えているからという説もあれば、公共図書館が無料で本を貸し出すからだという説もある。

個人的な見方だが、これらはどれも的を射ていないように思えてならない。近ごろの若者は本を読まないというが、数十年前にも、本を読むのは若者のうちせいぜい5%から10%にすぎなかったように思う。古書店で本を安く買えるのは、いまにはじまった話ではないし、図書館は昔から無料で貸し出すのが仕事だった。

それよりも、本の流通経路が荒れていることの方が大きな要因になっているように思う。どんな業種のメーカーにとっても、流通経路の確立は頭の痛い問題だが、出版社にとっては、考える必要すらない点になっている。取次という卸から書店という小売店への流通経路が確立していて、取次に納品しさえすれば、書店に配本され売ってもらえる仕組みが確立している。

高度経済成長期までは、本は主に町の小さな書店で売られていた。10坪から20坪の小さな書店が中心だった。書店にはたいてい、集団就職で地方からきた店員がいて、自転車でお得意さんに本や雑誌を届けていた。同時に、日本文学全集とか百科辞典とかのパンフレットを持っていく。当時、本の流通は小さな書店の店頭と御用聞きの本の柱で支えられていた。

高度経済成長で人件費が上昇すると、この方法は使えなくなった。御用聞きに回る店員がいなくなり、本の流通は書店の店頭での販売だけに頼るようになった。読者に書店まで来てもらい、本を手にとって見てもらう方法だけにほぼ頼るようになったのだ。小さな書店

では並べられる本の数がしれているので、大規模な書店が増えるようになった。

この流通の仕組みは、出版社や書店にとっても読者にとってもありがたいものだといえるだろう。出版社や書店にとっては、読者が店に来てくれて、店頭的大量の在庫のなかから自分で買いたい本を探してくれるので、効率的に販売できる。店頭の本を並べておくことが最大の宣伝になるので、広告費をそれほどかけなくてもいい。読者にとっては、書店に行けば大量に並んでいる本のなかから、自分の好みや必要にあうものを探せるので、効率よく買い物ができる。

だが、出版社や書店にとっての効率性は、ひとつの前提のうえに成り立っている。それは、読者が書店に来てくれるという前提である。酒飲みが酒屋や飲み屋に自然に集まるように、読書好きは書店に自然に集まる。読書好きにとって、書店はこたえられないほど楽しい場所であり、何時間いても飽きない場所だ。だから、読者が書店に来てくれるのは、疑う必要もないほど当然のことであった。

しかし近年、読書好きが書店に集まるのは当然だとはいえない状況が生まれてきているように思える。読書好きが書店に行くのは、書店が楽しいからだ。だが、最近の書店はどうも楽しくない。楽しくないどころか、腹が立つばかりと思えることすらある。

その一因は、書店の規模が大きくなりすぎたことにある。大きすぎて、なかなか本を探し出せなくなった。出版点数が多すぎることも一因だろう。点数が多すぎるから店頭での回転が早すぎる。新刊書でも書評ができるころには、もう買えなくなっている。友人や知人に勧められた既刊本を探すのは不可能に近い。

点数の増えすぎは困ったものだ。出版社は苦しくなると点数を増やして売上を確保しようとする。極端な場合に、新刊を取次に持ち込んだときに一時的に入る代金だけを目当てに、いうならば融通手形代わりに新刊をだすことすらある。だから、倒産直前の出版社ではたいてい、新刊点数が急増している。現在、出版業界全体がそういう状況に陥っているように思える。苦し紛れに出版点数を増やすときに、読みがいのある本

が出てくるはずがない。安易な企画、安易な内容の安易な本が増えるのは当然である。

もっと問題なのは、分かりやすいと称する本、気楽に読めると称する本が多すぎることだ。活字離れが進んでいるので、思い切り分かりやすい本でなければ売れないと、出版社は思い込んでいる。だから、普段は本を読まない層を標的とする本を作る。どの書店に行っても大量に平積みされているのは、この種の本ばかりのように思える。

酒飲みが酒屋に行ったら、ノンアルコールを売り物にするビールやワインばかりが並んでいたようなものだ。酒屋の主人に聞いたら、酒飲みばかりを当てにしていたら商売を大きくできないからね、普段は酒を飲まない層にも買ってもらえるようにしなければ、と言う。こう言われた酒飲みはどうするだろう。ざけんじゃねえ、お前んここでは買ってやらないからなと言うだろうか。だが、どの酒屋に行っても同じだったらどうするのか。

本好きにとって、いまの書店はそういう状況に近づいているように思える。本の流通を担ってきた書店が荒れている。書店が読書好きにとって楽しい場ではなくなってきた。だから、書店ではなく、古書店や図書館に足が向かうという場合もあるはずだ。あるいは、ごく少数だろうがインターネット書店で買う人もいる。出版社にとって最悪なのは、読書以外の趣味を探すようになることだろう。

ではどうすべきなのか。ほんとうなら、出版業界が点数削減運動に取り組むべきだと思う。現在7万点ほどの年間出版点数が10分の1とはいわないが、せめて半分になれば、書店が楽しさを取り戻すかもしれない。読者の立場からは、そして出版翻訳者の立場からは、これがもっとも望ましい解決策だと思う。出版社の立場からも、総点数が劇的に減れば、おそらく1点当たりの売上が増加するし、返本が減り、経費も減るので、採算がよくなるのではないだろうか。だが、業界の総点数が減らないのに、自社だけが点数を劇的に削減すると、売上がそれに比例して激減し、悲惨な結果になりかねない。一斉にはできないが、一社ではできない。だから、総点数の削減は容易ではない。

それよりも考えやすいのは破局シナリオだ。たとえば、取次の大手が倒産して出版社が多数、連鎖倒産するシナリオ、出版業界の大手がいくつか倒産し、中堅もつぎつぎに倒産するシナリオなどだ。そうならば少

なくとも一時的に、総点数が大幅に減少する。その後編集者や営業担当者などが小さな出版社を作って、着実な本、ほんとうに価値の高い本を出版するようになる可能性もある。破局は誰にとっても不幸だが、それ以外に出版業界を建て直す方法がない可能性もある。

いずれにせよ、総点数が減るかどうかは分からないし、減るのを待っているわけにはいかない。もう少し積極的な方法がないものだろうか。

きわめて間接的な方法ではあるが、読書の楽しみ、読書の素晴らしさを思い出して、周囲にそれを伝えていく努力をしていくのが、おそらくもっとも効果的だと思う。知らなかったことを学ぶのは楽しい。難しいことを学ぶのは楽しい。分かりにくい問題を考えるのは面白い。知らなかった世界を体験できる読書は素晴らしい。これが読書の原点だ。この原点に立ち返るべきだろう。

子供はみな、好奇心が旺盛だ。本を読んで知らなかった世界のことを知ろうとする。分かりやすく読みやすい本がいいなどとは言わない。読めない漢字や知らなかった言葉にぶつかってもへこたれない。へこたれないどころか、新しい言葉に出会えたことを喜んでいる。これが人間の自然な感情なのだ。文章が長いと文句を言い、言葉が難しいと文句を言い、内容が難しいと文句を言うのは、どこかに歪みがある。もっと素直になって、好奇心と知識欲を取り戻すべきなのだ。

もちろん、はったりと虚偽威し〔こけおどし〕ばかりの文章を読まされれば、文句を言いたくするのも当然だ。だから、本を作る側の人間はよほど注意しなければならない。だが、そのうえで、難しいから読む価値がある、新しい世界に出会えるから価値がある、知らない言葉が使われているからじっくり味わう価値があると主張すべきなのだと思う。

そういう本を求める層はごく少ないと思えるかもしれない。だが、読書は昔も今もオタクの世界だ。オタクのためにオタクが作るのが本だ。そして、昔も今も、読書オタクがいくら少なくとも1%はいる。たぶん5%ほどはいるのではないだろうか。少ないと思うかもしれないが、人数にすれば120万人から600万人だ。市場の核としては十分な数だ。そして、年間1兆円に満たない書籍の市場のうちかなりの部分は、この層によって支えられている。この層に背を向ければ、出版は成り立たないと思う。